

16) タチバナ＝橘

日本に自生するミカン科の常緑低木で、近畿以西の山地に生えて暖地の沿岸地に自生する。沖縄や濟州島、台湾にも分布するが、主に鑑賞用として香りを楽しむために庭園に植えられる。高さは3～4mになり、枝には鋭い刺があって、5～6月頃枝先に花茎2cm程の強い芳香のある白い5弁花をつける。果実は秋に黄熟し扁球形で径3～4cmとなり、柚子に似た香りを放つが、酸味が強く食用にはならない。『古事記』の「垂仁天皇記」によれば、常世の国にあるとされた不老不死の靈薬を求めて旅をした多遲摩毛理(タヂマモリ)が、「時じくの香の木の実」をもたらしたと記されており、『多遲摩』(タチマバナ)と呼ばれたものが、橘となったといわれている。しかし他にも諸説がある。学名は『*Citrus tachibana*』で、属名は柑橘類を意味するシトルスで、これは資生堂の男性化粧品の名前にも用いられている。種小辞は和名の橘である。

橘は古くから日本人に愛好された植物で、当時は柑橘類全体を総称して橘と呼んでいたらしい。『万葉集』には橘を詠んだ歌は68首あり、桜の43首よりもはるかに多く、当時のこの花に対する思い入れが感じられる。聖武天皇の歌では

橘は実さへ花さへその葉さへ 枝に霜降れどいや常葉の樹

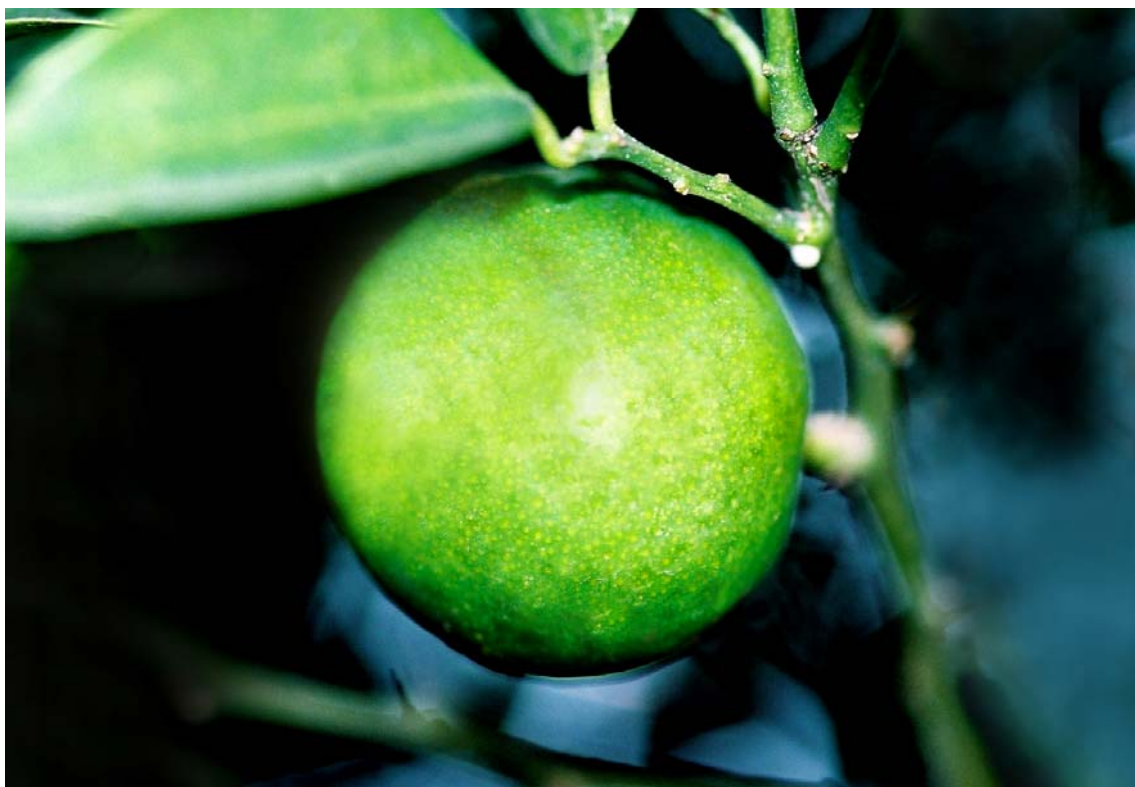
と詠われ、常緑の橘がいかに大切にされていたかが推測できる。『古今集』でも、

さつき待つ花橘の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする

と詠まれており、かつての恋人への思いを橘の花の香に替えて詠っている。奈良時代以来、紫宸殿では承明門に向かって右側に『橘』が、左側には『桜』が植えられていた。このために『右近の橘』『左近の桜』といわれていたが、桜は時の流行り廃りによって梅から桜に変わったのに対して、橘は一度もその座を明け渡すこともなく、1,300年以上の長きにわたって、その位置を守り続けている。

古代人はこの橘を長寿と幸福の理想の国、つまり常世の国の木と考えていたらしく、菖蒲草とともに玉鬘(タマカズラ)として髪に飾ったり、禍を避けるための道具としての卯杖や薬玉(クスダマ)とともに長寿を招福するとき用いていた。薬玉とは薬や香料を袋に入れ、玉状にして5色の糸で飾ったもので、端午に作るのが習いであった。しかしこの習俗は、陰暦の5月を「橘月」と呼んだことと無縁ではない。橘には神霊が現われ、ホトトギスはこの木に来て鳴くものとされていた。このため橘は農事を開始するときの花として、またホトトギスは勸農鳥といわれたのである。

中国では『神仙伝』によると漢の蘇仙公(ソセンコウ)が臨終の時に母に遺言し、来年は疫病が流行するが、庭の井戸水と橘の葉を用いれば病を直すことができると告げて果てた。翌年その通りになったと伝えられている。この故事により『橘井』(キツセイ)の語は転じて医者のことを言うようになった。そういえばそんな製薬会社もあったけど、「花たちばなは名こそおへれ、猶梅の匂ひにぞ、いにしへの事もたちかへり恋しう思出らるる。」といったのは兼好法師だったっけ…？



タチバナの半熟した青い果実。これが多遅摩毛理(タジマコモリ)が、もたらしたという不老不死の靈薬『時じくの香の木の実』であるが、今では誰も信じていない(埼玉県深谷市花園)。



ホンマものの『右近の橘』の果実である。冬には霜よけがかぶせられる(京都市平安神宮)。



平安神宮の橋に立てられた立て札(京都市左京区)。

[目次に戻る](#)